

令和6(2024)年度在外・国内研修員一覧 ※校費・研修期間2か月以上

研修員	川村 雅則（経済学部教授）
研修目的	地方自治体における非正規公務労働をめぐる問題と、問題解決に向けた労働組合及び自治体（首長・行政、議会）の取り組み他
研修先	北海道
研修期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日
研修実績	非正規公務員を中心に、地方自治体で拡大している非正規公務労働に関する調査・研究活動を行った。基礎情報の収集・整理に加え、問題解決に向けた取り組みが先行する自治体の実績について関係者（行政当局、労働組合、議員など）から話を聞いた。道内自治体のほか、非正規公務員当事者が労働条件の改善に取り組む高松市・広島市や、公契約条例（自治体発注の仕事で民間事業者との間で結ばれる「公契約」の適正化を通じて事業者の経営・労働条件の適正化を目指す条例）を制定している世田谷区などを訪問することができた。研究成果は、いずれも本学の紀要論文としてまとめたほか、北海道の非正規公務員問題についての書籍の出版を今夏に予定し、現在、関係者で執筆を進めている。研修期間中には、学習会などを通じて研究成果の還元に努めたが、そのことで構築された関係者とのネットワークは、今後、各自治体の情報収集・共有を行う上でも貴重である。

研修員	ブシャー ジェレミ（人文学部教授）
研修目的	批判的リアリズムと応用言語学研究の関連性に関する研究 言語教育における生成AIに関する研究
研修先	イギリス
研修期間	令和6年9月2日～令和7年8月27日
研修実績	サウサンプトン大学（英国）において、研究グループと共に2つの異なるプロジェクトに従事しました。第一のプロジェクトは、批判的リアリズム（Critical Realism）という特定の科学哲学に焦点を当て、それが応用言語学および社会言語学の研究にもたらし得る貢献について考察したものです。この研究成果は、編著『Critical Realism in Applied Linguistics』（Cambridge University Press、2026年）として結実しました。第二のプロジェクトも同様に、批判的リアリズムを教育理論への哲学的基盤および洞察の源泉として採用し、生成AIと言語学習（特に文章作成）の関係性を説明することを目的としました。このプロジェクトは、単著『Humanising Language Education in the Generative Artificial Intelligence Age: A Critical Realist Approach』（Routledge、2026年）という形で発表されました。また、この在外研修期間中、三冊の編著における各一章ずつの執筆、二本の査読付き論文、および一本の書評を執筆しました。さらに、数多くのウェビナーや学会でも発表を行いました。

研修員	宮島 良明（経済学部教授）
研修目的	米中貿易摩擦がタイの貿易に与える直接および間接的な影響に関する研究
研修先	タイ
研修期間	令和6年10月1日～令和7年3月31日
研修実績	<p>*タマサート大学ビジネススクールに客員教授として在籍し、タイ国立研究評議会（The National Research Council of Thailand (NRCT)）からの研究許可のもと、現地の研究者らの協力も得つつ、6か月間、調査研究活動を行った。</p> <p>*研究テーマは、アメリカと中国の間で続いている貿易摩擦が、東南アジア、とくにタイの貿易にどのような影響を及ぼすかである。</p> <p>*アメリカと中国の追加関税と報復関税の応酬のなか、中国や日本を含む各国の企業のなかには、関税を回避するために中国以外に新たな生産拠点を設けようと模索する動きもあるが、現時点での研究の結果、タイを含めた東南アジアが、その有力な候補地となっていることが確認できた。</p> <p>*なお、この間の研究成果の一部として、宮島良明（2025）「緊密化する中国とASEANの貿易」石川幸一ほか編『ASEAN経済新時代：高まる中国の影響力』文眞堂、を公刊済みである。</p>

研修員	井上 睦（法学部准教授）
研修目的	近年の日本のケア政策、家族政策について韓国との比較分析
研修先	北海道
研修期間	令和6年10月1日～令和7年3月31日
研修実績	<p>北海道大学公共政策大学院を拠点とし、国際比較の観点から近年の日本の社会政策、とくにケア政策、家族政策を位置づけ分析することを目的とし、（1）文献研究を中心とした理論研究および（2）データ収集および比較分析を中心とした実証研究を行った。その他、研究会や講演会、シンポジウムでの研究交流のほか、研修先での研究会での報告を行い、フィードバックと知見を得た。</p> <p>研修成果を踏まえ、研修期間中に、共編著『インフォーマルな政治の探究——政治学はどのような政治を語りうるか』（吉田書店、2025年）にて、「不妊の「脱政治化」の政治——市場の再編と「個人的なことは個人的なこと」」を発表したほか、2025年度中に家族政策の日韓比較を主題とする論文を発表予定である。</p>

令和5(2023)年度在外研修員一覧 ※校費・研修期間2か月以上

研修員	前田 秀基（工学部教授）
研修目的	正準量子重力の研究
研修先	ドイツ
研修期間	令和5年3月26日～令和6年3月23日
研修実績	<p>マックス・プランク重力物理学研究所（通称アルバート・アインシュタイン研究所）に滞在して研究を行った。主に量子重力グループのセミナーやジャーナルクラブに参加し、研究の幅を広げるためにブラックホール宇宙物理学グループや数値相対論グループのメンバーとも交流し議論した。滞在期間中にチェコとチリの共同研究者の訪問をそれぞれ1回ずつ受け、また自身はプラハ（チェコ）に3度招待され短期間の滞在研究を行った。一年間の滞在中に論文を3本発表し（単著1本）、セミナーと研究会で合計5回の講演を行った。これら以外に現在完成しつつある論文が2本ある。次の10年はより自然で一般性の高い問題に取り組み、研究における収穫の時期にしたい。</p>

研修員	赤石 篤紀（経営学部教授）
研修目的	新興・成長企業の財務構造の研究
研修先	カナダ
研修期間	令和5年3月27日～令和6年3月26日
研修実績	<p>アルバータ州立レスブリッジ大学に客員研究員として在籍し、同大学の研究者の協力を仰ぎながら「新規株式公開前後の企業成長および株式所有構造の変遷」に関わる文献やデータの収集・整理を行いつつ、研究ノートや研究論文の執筆を行った。これらの成果は、「上場市場別にみた新規株式公開企業の特徴」、「新規株式公開前後の企業の成長性と株式所有構造の変遷に関する分析」、「新規株式公開企業の業績パフォーマンスと株式所有構造の関係」といった研究ノート・研究論文として公表を予定している。</p> <p>その他、大学において開講されているファイナンスやコーポレート・ファイナンスに関する授業を聴講した。また、現地滞在中は、物価と金利の大幅な上昇が進むインフレ下にあり、様々な研究者や銀行員のとの意見交換の中でインフレ下における資産運用に対する考え方を知り得たことは、今後のファイナンス教育を考える上で大きな収穫であった。</p>

研修員	北原 寛子（経済学部教授）
研修目的	19世紀前半におけるBildungsroman概念のについての研究のため
研修先	オーストリア
研修期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日
研修実績	19世紀前半におけるBildungsroman概念の使用例とその普及について文献分析をもとに研究を行った。この概念については1810年代のモルゲンシュテルンの論文に使用が確認されることを1961年発表のマルティーニの論文が明らかにしているが、それから1868年のディルタイのテキストまで、使用例が確認されていない。このおよそ半世紀の間にこの概念がどのように継承されたのかについて、種々のテキストを分析して考察を行った。ウィーン大学図書館およびオーストリア国立図書館における資料分析が中心的な活動であったが、さらに研究会への出席や、その他のドイツ文学研究者らと交流し、意見を交換するなどした。得られた成果については、中間的な内容を『学園論集』第193号に発表したほか、今後学会誌に投稿する予定である。

研修員	吉田 充（経営学部准教授）
研修目的	フットボールゲームの統計的分析研究のため
研修先	イギリス
研修期間	令和5年4月1日～令和6年3月22日
研修実績	イギリスのバークベック、ユニバーシティオブロンドンのビジネス・法学部（旧ビジネス・経済・情報学部）に名誉研究員として招聘され、フットボールの統計分析についての研究に従事した。 スーパーバイザーがコンビナーを務める、フットボールアナリティクスのモジュールを聴講し、最新の分析方法や、アナリストがおかれている現状とその課題についての知見を得た。また、スポーツ関連のビジネス科目（スポーツガバナンス、スポーツマネジメントおよびスポーツマーケティングなど）からは本学の学部教育に活用できる情報を収集できた。さらに、スポーツビジネスセンター主催のカンファレンスや講演会などに参加し、プレミアリーグの現状と課題などを知る良い機会を得ることもできた。 サッカーの母国と言われるイギリス生活中、リアルタイムでのテレビ視聴、スタジアムでの観戦、指導現場の見学などを通じ、その文化に触れ経済面を知ることができ非常に有意義な研修であった。 学外においては、イギリスで研究している日本人と交流する機会に参加できた。様々な分野の研究者とミーティングすることができ、新しい視点を与えられ大変刺激を受けた。

研修員	大石 和久（人文学部教授）
研修目的	台湾美学および台湾映画研究
研修先	台湾
研修期間	令和5年4月1日～令和5年8月31日
研修実績	<p>国立台北芸術大学を拠点とし、台湾映画、特に台湾ニューシネマの美学的研究に取り組んだ。現地滞在中、国家電影及視聽文化中心（台湾における、映画を始めとする視聴覚文化を収集・展示・研究する国立の施設）では台湾ニューシネマに影響を与えた王童監督の特別展、高雄市電影館ではニューシネマの代表的監督・侯孝賢の『悲情城市』を特集した特別展、そして台北市立美術館では同じくニューシネマの旗手であったエドワード・ヤンの特別展を見学し、最新の研究の動向を知ることができた。国立台北芸術大学では、黒澤明を取り上げ、日本映画について講演を行う機会を得た。その際の台湾のオーディエンスとのやりとりは、私の見識を拡げてくれる貴重なものとなった。</p>

研修員	早尻 正宏（経済学部教授）
研修目的	スウェーデンにおける森林組合の史的展開と最新情勢に関する実証的研究
研修先	スウェーデン
研修期間	令和5年4月4日～令和6年3月29日
研修実績	<p>スウェーデン農科大学の南スウェーデン森林研究センターに招聘され、スウェーデンの森林組合（森林所有者が林地から安定的に収入を得るべく、自ら出資・経営する協同組合）における経営基盤の強化と組合員の所得向上の在り方に関する調査研究に従事した。滞在中は、同国内にある三つの森林組合のうち二つで聞き取りを行い、経営分析の基礎資料として最長で55年間に及ぶ中長期の財務データを得た。以上の調査結果に基づき、同センターの森林計画・政策グループのセミナーで、スウェーデンにおける協同組合観と協同組合法制の特徴に触れつつ、森林組合の資本調達と剰余金配分を巡る歴史と現状について報告し、現地の研究者から新たな知見であるという評価を頂戴した。こうした調査研究それ自体の成果に加え、公私にわたり親交を重ねる中で培った人間関係も重要な収穫である。南スウェーデン森林センターとは研究交流の継続を、森林組合とは研究成果の共有を約束し、再会を期して離任した。大学の内でも外でもよき人々に恵まれ、研究と人脈の両面で望外の成果を得ることができた在外研修となった。</p>

研修員	内藤 永（経営学部教授）
研修目的	バルセロナ自治大学における「世界共通語としての英語」（English as a Lingua Franca / World Englishes）のスピーキング習得の研究
研修先	スペイン
研修期間	令和5年9月21日～令和6年3月20日
研修実績	2023年9月～2024年3月までスペインに滞在する機会をいただき、バルセロナ自治大学にて、多言語と多文化が共存する環境で「世界共通語としての英語」がどのように発展しているのかについて研究を行いました。様々な文化背景を持つ人たちが共生するために複言語主義を受け入れる一方で、商売や仕事のために英語を柔軟に使用する姿勢は、English for Specific Purposes の観点からビジネスコミュニケーションを考える上で大きな助けとなりました。こうした言語に対する姿勢は、その歴史と広い意味での美術に対する視座の高さが背骨にあり、その視野の広さに裏打ちされていることを現地で生活することで体感することができました。こうした研究成果の一部は2024年3月に刊行した『ビジネスコミュニケーションのための英語力』（内藤・寺内監修、朝日出版社）に反映することができました。

研修員	大滝 哲祐（法学部教授）
研修目的	ドイツにおける契約締結上の過失の研究
研修先	ドイツ
研修期間	令和5年10月1日～令和6年9月12日
研修実績	ドイツのバイエルン州にあるバイロイト大学に客員研究員として在籍し、受け入れ先の同大の教授から助言を受けつつ、研修の目的である契約締結上の過失の研究を提唱者であるイエーリングから現在に至るまで、ドイツにおいて、判例・学説上どのように発展したかについて、同大で所蔵されていた文献を読み進めて、これまでの自身の研究を踏まえて考察を行った。それと同時に、ドイツの民法や消費者法について知見を深めるべく、受け入れ先の教授の主催する大学院のゼミナールに参加した。特に、EU（欧州連合）をはじめ、他国との比較方法に関して、わが国の場合とは異なる点があり参考となった。得られた成果については、今後、研究報告、論文執筆や公刊などをする予定である。

研修員	五十嵐 素子（法学部教授）
研修目的	教師・生徒間コミュニケーションの質的研究
研修先	スイス
研修期間	令和6年2月22日～令和7年2月21日
研修実績	<p>スイスのバーゼル大学に研究員として在籍し、授業の教示場面および協働学習過程の相互行為分析に取り組んだ。近年導入されつつある、一人一端末を活用した授業の分析に対応するため、エスノメソドロジーおよび会話分析（EMCA）の手法を基盤に、マルチモーダルな視点から授業データの分析を行った。また、滞在中は、データセッションや各種講義、ワークショップに参加し、ヨーロッパの研究者との交流を通じて、研究動向の把握と分析手法の洗練に努めた。これらの成果は、国際エスノメソドロジー・会話分析学会（IEMCA）およびマンチェスターで開催された世界教育学会（WERA）にて報告し、今後は国際プラグマティックス学会（IPrA）および世界授業研究学会（WALS）、日本教育学会での発表も予定している。研修を通じて得た知見とスキルは、今後の授業研究、協働学習研究の発展と教育現場への応用に資するものとして、現在論文化を進めている。</p>

令和4(2022)年度在外研修員一覧 ※校費・研修期間2か月以上

研修員	仲松 優子（人文学部教授）
研修目的	フランス近世・近代史研究のため
研修先	フランス
研修期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日
研修実績	フランスのエクス＝マルセイユ大学の地中海および南ヨーロッパの時間・空間・言語研究所（TELLEMe）に招聘され、フランス近世および近代史の研究に従事した。特に近世・近代における工業化とジェンダーについて、同大学の研究者の協力を仰ぎながら、研究所所在地のエクス＝アン＝プロヴァンスおよびフランス国内の文書館・図書館所蔵の史料や文献を収集し、研究を進展させた。また、同研究所の研究セミナーに参加して、近年の研究動向にふれる機会をもち、研究成果として研究発表を行った。これらをとおして、同研究所の所属研究者や他大学の研究者と学術交流を行い、近世・近代における南フランスの経済および社会について理解を深める機会を得ることができた。

研修員	館田 晶子（法学部教授）
研修目的	フランスにおける国籍法制の変遷 — 第三共和政以降を中心に
研修先	フランス
研修期間	令和4年4月8日～令和5年3月31日
研修実績	リヨン第2大学において憲法および外国人法・国籍法に関する調査研究を行った。そのほか、大学において開講されている憲法や基本権の授業や、学内外のいくつかの研究会を聴講した。滞在中は、2度の報告機会を得た。ひとつはリヨン第3大学で行われたシンポジウムでの基調講演であり、もうひとつはトゥール大学で行われた日欧憲法研究会での研究報告である。また、日本語での成果として、欧州人権裁判所の判例評釈、短い翻訳、日本のオンラインセミナーなどを通じてフランス法を日本に紹介することもできた。滞在中は、大統領選と国民議会選挙があり、また、スト・デモなどの社会運動にも多く遭遇し、フランス社会の政治や社会問題への関心と空気を感ずることができたのも大きな収穫であった。

研修員	山本 健太郎（法学部教授）
研修目的	政党システムの変化に関する理論的探究
研修先	アメリカ合衆国
研修期間	令和4年6月29日～令和5年6月30日
研修実績	ハーバード大学ウェザーヘッド国際問題研究所日米関係プログラムに、アカデミック・アソシエイトとして在籍し、政党システム変化に関する理論を研究した。プログラムのウィークリーセミナーで報告する機会を得、選挙におけるミクロな論理が政党システム全体に影響を与えているのではないかという問題意識を披歴し、出席者と質疑応答を行った。他にも、最新の文献などを調査することで、近年の政治学においては、データサイエンス化が顕著であるが、そのなかでどのような点に着目して議論を組み立てれば比較優位を持てるか、といった視点で自らの研究をとらえなおす機会ともなった。また、同プログラムや他が主催するセミナーに出席したり、同じプログラムの他のアソシエイトなどとの交流により、専門外の問題についても様々な知見を得た。

研修員	大屋 定晴（経済学部教授）
研修目的	ドイツにおけるマルクス学派的政治（空間）経済学等の研究
研修先	ドイツ
研修期間	令和4年9月2日～令和5年9月1日
研修実績	<p>ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン地学・地理学部人文地理学科で、マルクス学派的政治（空間）経済学の研究を行った。「経済・都市地理学の基礎概念」にかんする講義、大学院演習等に参加し、討論会での発表、研究者との意見交換、批判理論ならびに批判的社会研究を志向する各種学会への参加をつうじて、ドイツにおけるマルクス学派についての最新の知見を得た。1990年代以降の統一ドイツでは、とりわけ「フランクフルト学派」第一世代の議論を批判的に継承することで、さまざまなマルクス学派的思潮が存続・興隆している。さらには英米圏マルクス学派経済地理学に対するドイツ語圏研究者の批判的受容も調査した。今後は、日本とドイツにおける新自由主義的グローバリゼーションについての共同研究を当地の研究者と進める予定である。</p>